

第IV部門

形成要因を考慮した神奈備型景観の分類に関する一考察

京都大学工学研究科 フェロー会員 ○細田 尚
 京都大学工学研究科修士課程 学生会員 清水 康晶

1. はじめに： 近畿地方には秀麗な円錐形・笠形をした神奈備山と総称される低山が数多く存在していることが知られている。それは、樋口[1]による日本の景観分類の中の山の辺の景観を構成する主要な要素でもある。本研究は、笹谷等[2]による神奈備山の地形類型を参考にして、山の形成要因や地質を考慮することで、より詳細で正確な地形分類を提案しようとしたものである。

2. 神奈備山の定義： 神奈備山の定義として、従来、神道考古学の基礎を築いたとされる大場[3]による三要件が用いられるのが通常である。ここでは重複を避け、それらと同等と考えられる白洲[4]の記述を紹介する。「それらの山は、せいぜい三、四百メートルの高さで、山というより丘に近い。・・大きな山系の一部を占めていることもあり、ささやかな神社の背後に神体山とおぼしき山を見る時もある。それらの山に共通することは、必ず川に面しており、山上に神の降臨する磐座があって、神木が立っていることである。そういう形式を「神奈備（かむなび）」といい、・・・山は生活に欠くことの出来ぬ水を与え、その水は田畑をうるおすだけでなく、山から伐り出す材木や石材を運搬する役目もした。」

3. 神奈備山の地形分類： 笹谷等[2]は神奈備山の地形類型を、孤立丘、端山、尾根肩、山塊の4通りに分類している。これらの4類型は神奈備山の特徴をよく表現しているが、詳細に見ると不十分な点もあると考えられる。例えば三上山はこの分類では孤立丘に該当すると考えられるが、実際は琵琶湖の形成過程で生じた地殻変動により隆起した地下の花崗岩とともに、その上方にあったチャートが隆起して形成された山である。周囲には妙光寺山、田中山といった花崗岩の山が存在しているので、平野内の連山として分類するのがより正確である。また、上記の端山においても端正な円錐形の神山、御蓋山と、そうではない甘奈備山、香具山は形成要因の観点から区別するのが妥当と考えられる。そこで本研究では、まず山地端山と平野（盆地）内の山（台地）に分類した後、その中をさらに詳細に分類することにした。

地形の分類と該当する山を示せば以下のようなになる。

A. 山地端山：	尾根・一面富士型	三輪山
	尾根・連山型	交野山（こうのさん）、八王子山
	山塊型	河内飯盛山
	孤立峰・砂時計型	神山、御蓋山
	孤立峰・地質要因型	甘奈備山（ホルンフェルス）、 香具山（山体・花崗岩、頂部・斑レイ岩（生駒石））
B. 平野(盆地)内	孤立峰（台地）火山型	畝傍山、耳成山
	台地・山塊 断層型	吉田山、男山
	連山	三上山、太郎坊山（赤神山、湖東カルデラ噴火）

4. 各山の基本情報： 参考のため、上に挙げた山の中からいくつかの山の地質や成因に関する基本情報を記述する。

- ・三輪山（大神（おおみわ）神社）：奈良盆地の基岩である領家花崗岩地帯（白亜紀後期に貫入）が隆起した笠置山地の端山、ただし山頂を含む部分的な帯状領域はそれより古く硬い斑レイ岩（生駒石と同じ）。大鳥居方面から見ると富士山型の秀麗な形をしているが、南側（近鉄・朝倉駅）方面から見ると頂上が平坦で尾根型に分類されることが多い。
- ・交野山（こうのさん、山頂に三宝荒神と巨大磐座、写真-1）：領家花崗岩からなる生駒山地の端山で山頂に花崗岩の巨

大磐座がある。これら数個の巨岩の存在が特に秀麗な形を形成した要因と考えられる。南北の旗振山と国見山を合わせて尾根型連山に分類した。

- ・神山（上賀茂神社，神山の遥拝所として成立）：中生代ジュラ紀の付加体である丹波帯の基岩が隆起することで形成された北山山地の端山で，地質は砂岩。地質的要因は認められず，このことが円錐形の秀麗な形になった理由とも考えられる。上賀茂神社本殿前の砂山は神山の形を模したと言われている。
- ・三上山（御神神社，三上神社）：琵琶湖の形成過程における地殻変動により隆起した地下の花崗岩とともにその上方にあった硬いチャート（ジュラ紀の付加体）が隆起して形成されたと考えられる。
- ・甘奈備山（山頂に神奈備神社，麓に薪神社，月読神社は無関係）：領家花崗岩が隆起して形成された生駒山地の端山で山頂部はチャートのホルンフェルスで構成されており比叡山山頂のように角張っていて秀麗とはいえない。桓武天皇が船岡山に立ちそことこの山を結んだ線上に朱雀大路を置いたと言われている。周辺には大阪層群が堆積し
- ・耳成山：日本列島が現在の位置に定置した約 1500 万年前の火山活動による噴火によって形成された円錐形の山。畝傍山も同様。平地内にある秀麗な孤立峰はすべて火山活動によって形成された山である。

5. 遠景の分類： これまでは近景を対象としたが，遠景については下記のような分類が可能であることを指摘したい。

- ・道標型 甘奈備山：桓武天皇は平城京から長岡京を度々往復したと思われるが，その道中，写真-2 に示したような神奈備山の姿を常に見てそれを道標として歩いたと思われる。
- ・立体曼荼羅型 八王子山，神山，御蓋山，三上山：写真-3 に示した比叡山の麓に位置する八王子山とその左右の低山の姿は八王子山を如来群と見立てた立体曼荼羅型の景観とみなすことができるように思われる。三上山も十分に引きを取るとそのように見なすことができる。



写真-1 秀麗な交野山と旗振山（右）・国見山（左），尾根型連山

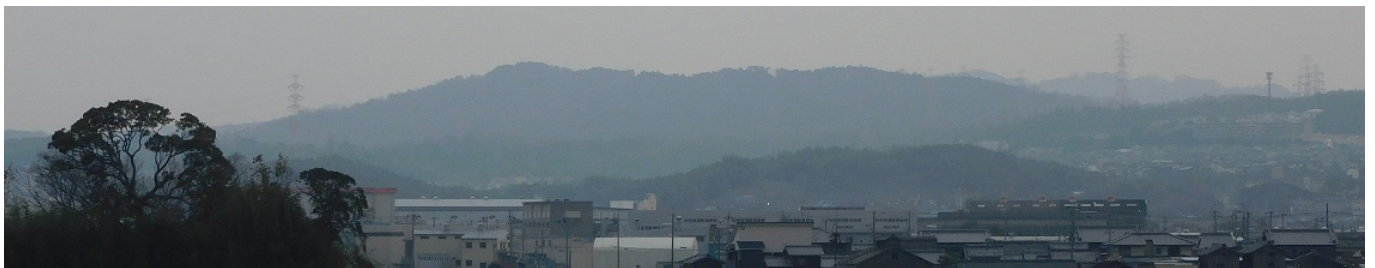


写真-2 甘奈備山遠景（木津川・上津屋橋近くから撮影）



写真-3 八王子山（立体曼荼羅型景観）

6. おわりに：今後，近畿地方の他に全国の多くの事例について考察するとともに，地域富士についても検討したい。

参考文献：[1] 樋口忠彦：景観の構造，技報堂出版，1975。[2] 笹谷康之・遠藤毅・小柳武和：第7回日本土木史研究発表会論文集，pp.141-146, 1987。[3] 大場盤雄：祭祀遺跡，角川書店，1970。[4] 白洲正子，木と石と水の国，近江，駸々堂出版，1973。（「美しいもの，角川ソフィア文庫，2015」に再掲）